

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第107号

- 小, 中, 高等学校, 盲・聾・養護学校対象 -

平成18年10月発行

これからの時代に求められる「国語力」をはぐくむために 教材研究の新たな視点と教材活用を踏まえて

当センターでは、昨年10月に『文化審議会答申』（平成16年2月3日）を踏まえた『指導資料』通巻1491号を発行し、これからの時代に求められる「国語力」をはぐくむ上で国語科が果たすべき役割等について詳述した。その後、OECD（経済協力開発機構）『生徒の学習到達度調査（以下「PISA調査」という。）』の結果を受けた『読解力向上プログラム』（平成17年12月）や、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の『審議経過報告』（平成18年2月13日）が出され、より一層、「国語力」の向上に向けた取組が求められることとなった。

そこで、本稿では「国語力」をはぐくむための様々な取組の中から、これまでの国語科学習指導を基に改善することができる、教材研究の新たな視点と教材活用に焦点を当てるとともに、PISA型「読解力」の向上につながる学習指導の工夫について、他教科等や異校種との連携を図るといった、教科横断的な活動を視野に入れて述べる。

1 「国語力」や「読解力」をめぐる動き

(1) 文化審議会答申の「国語力」とは

文化審議会答申は、成人も含む広く国

民の「国語力」向上をねらい、「国語力」を次の二領域に分けてとらえた。

中核としての、考える力、感じる力、 想像する力、表す力 の基盤となる「国語の知識」や「教 養・価値観・感性等」

こうした二領域の力を高めるために、特に、学校教育においては「論理的思考力」と「情緒力」の育成を重視するとともに、「読む」、「書く」の充実や全教育活動を通じた「国語力」育成の視点、読書活動の推進などが提言された。（詳細は、文化庁 Web ページ http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03120101/001.htm#top）

(2) 読解力向上プログラムの「読解力」とは

PISA調査は、義務教育修了段階にある生徒の学力（「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」、「問題解決能力」、「読解力」）を国際的にみることをねらいとして実施されている。

平成15(2003)年の調査で日本の15歳児の「読解力」が低下したことを受けて、文部科学省では、結果等を更に詳しく評価・分析した、読解力向上プログラムを取りまとめた。

(詳細は、文部科学省 Web ページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.htm)

特に、読解のプロセスでは「テキストの解釈」と「熟考・評価」に、出題形式では「自由記述（論述）」に課題があるとし、各学校で求められる改善の具体的な方向として、次の三つが示された。

【各学校で求められる改善の具体的な方向】

テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実

テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実

様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

(3) 審議経過報告で示された「国語力」とは

審議経過報告は、平成17年10月の中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」で打ち出された基本的な考え方を基に、学習指導要領全体の見直しを主眼にした審議経過を報告したものである。

(詳細は、文部科学省 Web ページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm)

「国語力」の育成については、文化審議会答申やPISA型「読解力」の視点が盛り込まれているが、中でも「思考力・表現力等の育成」の視点については次の7点が示された。

(思考力・表現力等の育成)

文章や資料の解釈、熟考・評価や論述形式の設問を解く力（PISA型「読解力」）の向上

記述式設問の正答率の向上

- ・ 文章を深く読み、分析的に理解した上で記述する力の育成

PISA型「読解力」向上のための方策

- ・ テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実

- ・ テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実

- ・ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の拡充

子どもの社会的自立に向け、「読むこと」と関連付けた「書くこと」の充実

- ・ 文章や資料の読後、自分の考えをA4判1000字で表現できる力の育成
国語科を中核にした国語科以外の教科等との連携

- ・ 自分で課題を設定したり課題を追究したりすることができる力の育成

- ・ 読んだり聞いたりしたことを、評価したり応用したりする力の育成

相手の気持ちを おもんばか 慮って聞く力や話す力の向上

- ・ 集中力をもって相手の話を聞く機会の拡充

- ・ 相手の気持ちを理解しながら「聞く力」や「話す力」の育成

我が国の文学や言語文化を継承・発展させるために、創造したり演じたりする力の重要性

- ・ 読書、演劇等の鑑賞、詩歌・俳句等の創作、書写などの言語活動ができる力の育成

2 「国語力」と「読解力」とのつながり

前項でも示したとおり、文化審議会答申の「国語力」とPISA型「読解力」とのつながりについては、審議経過報告の「国語力」にかかわる項目から読み取ることができる。特に、「考える力」を中核とした視点と「教科横断的」な視点の二つは、これからの時代に求められる「国語力」をはぐくむ上で、看過できない方向性を示して

いる。そこで、これらの二点を踏まえ、(1)では、教材研究の新たな視点を提示することで、児童生徒に「考える力」を中核とした「国語力」をはぐくむ方策についてまとめるとともに、(2)では、教科横断的に「国語力」を高める指導策について、『「読解力」向上に関する指導資料』（以下「指導資料」という。）等を基に述べる。

(1) 考える力を中核にした「国語力」向上策

ア 小学校下学年における発問の工夫から
小学校下学年においては、教師の発問を工夫することが、児童の考える「場」を増やし、考える力を一層高めることにつながる。そこで、小学校第3学年の説明的文章教材「ありの行列」の導入段階における、考える力を育成する発問例について示す。

「ありの行列」の主な発問例	
こ れ ま で の 発 問 例	「ありの行列」を読んで、どんなことを考えたり感じたりしましたか、発表しましょう。
	教科書には、「ありの行列」は、いつ、どこで、見かけると書いてありますか。 (以下省略)

考 え る す れ	「ありの行列」を読んで、初めて知ったことや驚いたこと、疑問に思ったことを、隣の友達と話し合しましょう。(対話による相互追究を通して、問題解決的な学習の課題の提示へつなぐ。)
	みんなは、「夏になると、庭のすみなどで、ありの行列をよく見かけます。」のところを読んで、疑問に思ったことはないですか。(「夏にならないと見られないのかな?」、「庭のすみ以外でも見たことがあるよ。」といった疑問が出される。)
か れ	では、どうして「夏になると」、「庭のすみ」とあるのかな。(『「庭のすみなどで」とあります。『なごど』ってどういうことですか。』との声が出る。)
	そうだね。どう考えますか?(『「なごど」だから、ほかの場所でも見られることもあるということだと思えます。』、『「よく見かけます」だから、『庭のす

の 発 問 例	み』は、ほかの所より『よく見かける』ということだと思います。」との声が出る。)
	いいところに気付いたね。では、「夏になると」は、どこにつながっていくかな?(『「見かけます」です。』、『「よく見かけます」だと思います。』) さあどっちでしょう? 「よく見かけます」につながっていくと考えると、「夏」にならないと「ありの行列」が見られないのかなという疑問が解決できませんか? 行列は、夏以外でも見かけるけれど、夏は、ほかの季節より「よく見かける」ということだね。(児童の生活の中での体験を基に、表現に即して読み取る大切さを体得させる。)(以下省略)

イ 中学校における問題解決的な学習の工夫から

問題解決的な学習を展開することは、生徒に主体的な取組を促すことはもとより、考える力や感じる力などを効果的に身に付けさせる上で有効である。そこで、中学校第1学年教材「空中ブランコ乗りのキキ」を基に、考える力を育成する工夫について示す。

教材全体の流れは次の通りである。

次	時	展 開	学 習 目 標
	1	素読、場面分け、初発の感想、学習課題の設定	作品を通読して初発の感想を書き、場面分けをする。
	1		初発の感想を基に、場面ごとに学習課題を設定する。
	1	場面ごとの学習課題の解決	場面1の学習課題を解決する。
	1		場面2の学習課題を解決する。
	1		場面3の学習課題を解決する。
	1		場面4の学習課題を解決する。
	1	主題のまとめと発展的な学習課題の	4場面を振り返り、作品の主題をまとめる。
	1	解決	発展的な学習課題を解決する。

こうした学習の際に留意すべきことは、生徒主体を念頭に置きつつも、あくまで教師が各課題等の答えをしっかりと持たなければならないということである。これ

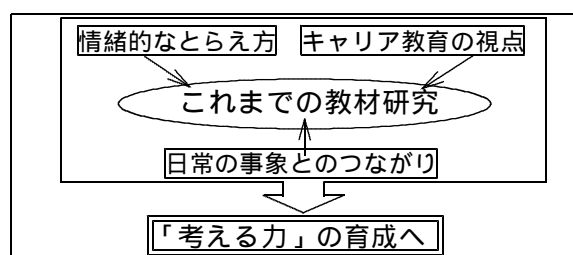
まで、問題解決的な学習では生徒主体の学習を尊重するあまり、生徒の発言だけに依拠したまとめが行われ、自分の解決した課題に対する「到達点」が曖昧なままであったり、分かったつもりで学習を終えてしまったりすることがあった。そこで、このような問題点を払拭するために、教師による読みを基に、具体的な「到達点」を明示することが必要となってくる。こうした「到達点」があることは、生徒が自己評価、相互評価活動を行う際の「視点」を明確にする意味でも有効である。

例えば、生徒の初発の感想として教師は、主人公「キキ」の「ブランコ乗りという仕事にこだわり、『チャレンジし続けたい』、『人気や評判を大切にしたい』との意識で仕事にこだわった生き方に共感する。」といった「キキ」派の意見と、ピエロの「口口」の「仕事にプライドを持ちつつも、『ピエロならどこからも落ちない』と言う、人間的な優しさを重視したい。」といった「口口」派の意見を予想することができる。これらは、共に「キャリア教育の視点」を見据えており、尊重すべき意見と言える。

また、先のオリンピックでのフィギュアスケート4回転ジャンプのチャレンジと、「キキ」の4回転宙返りとを比較して、観衆の過大な期待によって追い込まれる「キキ」の心情を、オリンピック選手の心情と比較するといった、「日常の事象とのつながり」を踏まえた感想を予想することもできる。

さらに、こうした観衆の姿勢を受けて「情緒的なとらえ方」をした感想を予想す

ることもできる。(下図参照)



こうした教師の読みは、主題をまとめる段階等で、生徒だけでは主題に十分迫れない場合などに提示することが有効である。

ウ 高等学校におけるワークシートの工夫から

『平成14年度高等学校教育課程実施状況調査報告書』には、「読むこと」の指導上の改善として、次のような提言がなされている。

何が書いてあるのかという読みにとどまらず、どのように書いてあるのか、なぜこのように書いてあるのかなどという表現の仕方にも着目する指導を行うことが求められる。(アンダーラインは筆者)

こうした指導を的確に行うためには、例えば、「国語総合」の多くの教科書で採用されている評論文の一つである「水の東西」(山崎正和)を通して、生徒に物事を対比的にとらえる「考え方」を学ばせるとともに、「わたしの文化論」と題した「表現活動」を仕組むことが有効である。以下に、「表現活動」を進める際のワークシートの工夫例を挙げる。

「わたしの文化論」作成のために
 (課題) 洋の東西で感じる対比事象を挙げ、「水の東西」の対比構造や表現技巧を参考にして、「わたしの文化比較論」を書きなさい。ただし、A4判縦書きの原稿用紙で、1000字以内とします。なお、必要に応じてこのワークシートを活用すること。
 (ルール) 取り上げる対比事象(テーマ)を挙げる。

例：「水の東西」の場合 水の鑑賞の仕方

洋の東西ごとに、対比構造をまとめる。

例：「水の東西」の場合 東西ごとの特徴

段落構成を選び、字数配分を考える。

パターン1

第1段「水の東西」の場合 東洋の水
(400字程度)

第2段「水の東西」の場合 西洋の水
(400字程度)

第3段「水の東西」の場合 まとめ
(200字程度)

草稿 推敲 清書の順でまとめる
草稿 字数にこだわらず、書きやすい段落から書く。

他の留意点：

推敲 内容や表現の重なりをみる。
接続詞を効果的に使って、対比や逆接、順接、まとめなどを、分かりやすく示す。

他の留意点：

清書 改めて「水の東西」の対比構造や表現技巧などを参考にしているかを確認する。表現についても精選する。

他の留意点：

(評価) ~ のルールを観点に、自己評価をする。

- 自己評価例
- 1 よくできた
 - 2 だいたいできた
 - 3 あまりできなかった
 - 4 できなかった

(評価の理由、感想、展望を2行で！)

ワークシートを作成する際は、生徒の実態に応じて、限られた字数の中で書く活動を多く設定する必要がある。こうした活動は、生徒に洗練された語彙力・表現力を要求することになるとともに、ぼんやりと「分かったつもり」になってい

る生徒の思考を「分かった」と言えるよう、定位させることにもつながる。

(2) 教科横断的に「国語力」を高める指導策

『小学校学習指導要領解説総則編』の第6節1(1)に「学校生活全体を通して、言語に対する関心や理解を深め、言語環境を整え、児童の言語活動が適正に行われるようにすること。」との文言がある。「単に国語科における指導だけでなく、学校生活全体において配慮することが大切」の解説を待つまでもなく、教科横断的な視点で「国語力」を高める必要がある。

また、「総合的な学習の時間」のねらいにも、PISA型「読解力」が求める「問題解決的な能力や知識・理解を応用する能力を、教科横断的にはぐくむ」といったねらいとの一致が見て取れる。

こうした教科横断的な指導事例としては、平成17年12月、PISA型「読解力」を学校教育全体で高めることを目的とした指導資料に示された。(詳細は、文部科学省Webページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201.htm)

この指導資料では、15歳児の「読解力」向上を図るために、小学校段階から中学校第3学年までの全教科等での指導として、次のア～ウの三つに分けて示された。

【指導例一覧】	
ア	テキストを理解・評価しながら読む力を高めること(19例)
(ア)	目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
(イ)	評価しながら読む能力の育成
(ウ)	課題に即応した読む能力の育成
イ	テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること(10例)
(ア)	テキストを利用して自分の考えを表現する

能力の育成 (イ) 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成
ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実させること(18例)
(ア) 多様なテキストに対応した読む能力の育成 (イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

例えば、「ウの(イ)」の小学校第3学年理科の事例(38)では、「豆電球に明かりを付ける実験を行っていて気付いたことを、生活経験と関連付けたり比較したりしながら自分の言葉でまとめる課題」が示された。



豆電球に明かりをつける実験結果と日常生活経験を結び付け、自分の言葉で説明させることを通して、簡潔に表現する能力を育成する。
(評価に当たっては、最も簡潔明瞭に説明できたものを高く評価する。)

もとより、この指導資料では国語科の事例が最も多く示されてはいるが、全47の指導例のうち29例は国語科以外の事例となっている。

ここまで「これからの時代に求められる国語力」について述べてきた。ここで、改めて標題の「これからの時代」という文言に着目してみると、先行き不透明な「これからの時代」においては、一定の慣習や知識といった「狭い意味での学力」はあまり役に立たないことが多く、むしろ、自ら課題を見付け、自ら解決する「問題解決能力」や、変化に対応することのできる「学び方」といった「広い意味での学力」が求められていると言える。

同時に、こうした「広い意味での学力」をはぐくむためには、教師による一層の教材研究と教材活用が欠かせない。先に述べた小・中・高等学校の改善策は、発問の工夫から児童生徒の関心・意欲を高めたり、登場人物の仕事への認識から職業観・勤労観を高めたり、発展的表現活動から日本文化を再認識させたりするものであった。こうした改善を成功裏に導くためには、やはり、発問や児童生徒観、ワークシートなどを、教材分析を通して見直すといった、深い教材研究が出発点にならなければならない。

過去の学習指導要領に、次のような一節がある。「学校における教育課程がどのように移り変わることがあっても、国語の学習と指導をゆるがせにしてよいような時代は永遠にない」

改めて、国語科教師としての職責を再認識し、「これからの時代」に求められる「国語力」を児童生徒に育成していくために、より一層、深い教材研究を追究していきたい。

【引用・参考文献】
『「読解力」向上に関する指導資料』(文部科学省)
(教科教育研修課)